艾花笹

奥編

大尾

へ13
2911
2上

序

凡そ人の称ぶこと。その所作に應じて元亨利貞。
高貴の日々の金銀を称ぶ。上職に成業の
開るを称び。富豪の衣類と髪の飾を称
ぶ。武士を儲孫と称ぶ。武士を儲孫と称
ぶ。婚礼を祝ぶ。要あり。称ぶ。
中年。余ぶ。筆頭に称ぶ。ものに。

門 へ 13
2911
2
昭和九年 七月六日 購求

著述の全備となる〻ハ月が重り日と累ね絵。
年を積て会を志し眺を除きて若
章なし進みて編を草するもの〻憚ありて
因て想を筐中数六の酒に類しは
戸をぬるもの〻一巡を侍ハつたし事ゆや
月日に写もる〻いと長きなる紙面に
言まば書就せぬ空おり此ものかいえぬその

評ゆめあらたして長きとも言ば曲なる
結ぶハ作者の詠びきの〻なされバ
風雅の心いと長紀も遺る紙拾ふ濃の月
言ふは全部の暁となりぬることが歓びが
かの春の夜明の歓び為し倶ふ
寒をくして嘘言ならんと願ふ
精撰作者人らの嗜蘭なる楽

○角力取
横綱
赤ふんどしの
あつぱらぱらり
あきの世

○於絹
○角力取
牛車

於若
俠客
長五郎
於寅
一國齋
國虎画

花筐拾遺　溪の月後編巻之上

東都　松亭金水編次

第七回

古人の語に曰く。慮門に入るときんば色邪に飛ぶ。とかの。
ことわざ量らずも。長谷の紀者の奥山に。お芳に逢て。
の物語をする席に。溪ざうの人を受しうの人。若干に痛
め。良人松次郎が在去に在しとき。情ごとに愛女に悪を
ぶるとう。よ。紀名連のあるに。依て彼処に立出ぶ。丈より絶て

おとづれ
音信るく。この比花山より也花御と称て。七夕ぶり方と年ねる
より。尚もいよ〳〵その家の妻の性方若きびとらの内に此方に初てれ
多ぶくも。毛程出て海べうぶ。門口ホトトギスの松次郎が。紙
儀れもありまと一口ゆい。家の名も出て初る初られ。世間の人ホ
種とし。浮説流布や後指とさまきん。もちろもくち。此方等
くり良人ホ指ア。よ〳〵や金銭の費らあるとも。人ホ人とをとさ
らば。性方のあまとれるやあるべき。拙計らんホ依て居とんの
理ホ出来せ〳〵ぶまと。ぶ人きあり。ぶ家ぶるの内紙ととそり人。

脱ホ拭と取とうホ見まで生てこの分の兄ある長ぶ弁が。不く
世話ホ出ぶ。あくるの内ホ折ば。筆くの三程ホて。毎出人を指に内部の
ものの誰ホつて今ホ考ぶる者も白けまば。此処へ引とう。ホ(七)と初
めて出入ホ。ぶまるホ出ぶ。ホ白ホ。この分ホ初ホて一点ぶうも。
指と。廃この分きのいよく知ア。とて在ぶうめど。年妻とうホ名の
あまば。何とぶく新後且ホ殆ホ実荒等ぶ。名ホん出ホ言ア。
捨ホきのとホ。云の場ホも頼より。第一ね。拙ると今まさ
小漢ぶう人。ね性するとも。さ〳〵とホて。表ぶ出て人を掛け。計

らびのよべさのゝび。拙して又まびまこと一層の若を結さするのこと怪
なきさのゝさまびこと此まゝ不接て亦べさきるあゝぶ。兄長の弟が
飯アるび。密不深じて知る也も偽て。花も角も汁らちんこと。
支より見ゝ不丁雅て色らせ。兄が飯りて笑せけるとも赤らぎさ
まび松次郎ハ。ちのゆど行とるゝ。お勢が教つさ。公不思ひあり乳
母。人なき打ち言うち祈め。まこの次第へ倚ゝて拍思ひ為
けしき乳母のまび。麻ゆ上思い出影と。この頃後て夜出仕せび況
て探洞アるゞせぎる分のお芳が為へ性しゝき。初めハさせる情公の

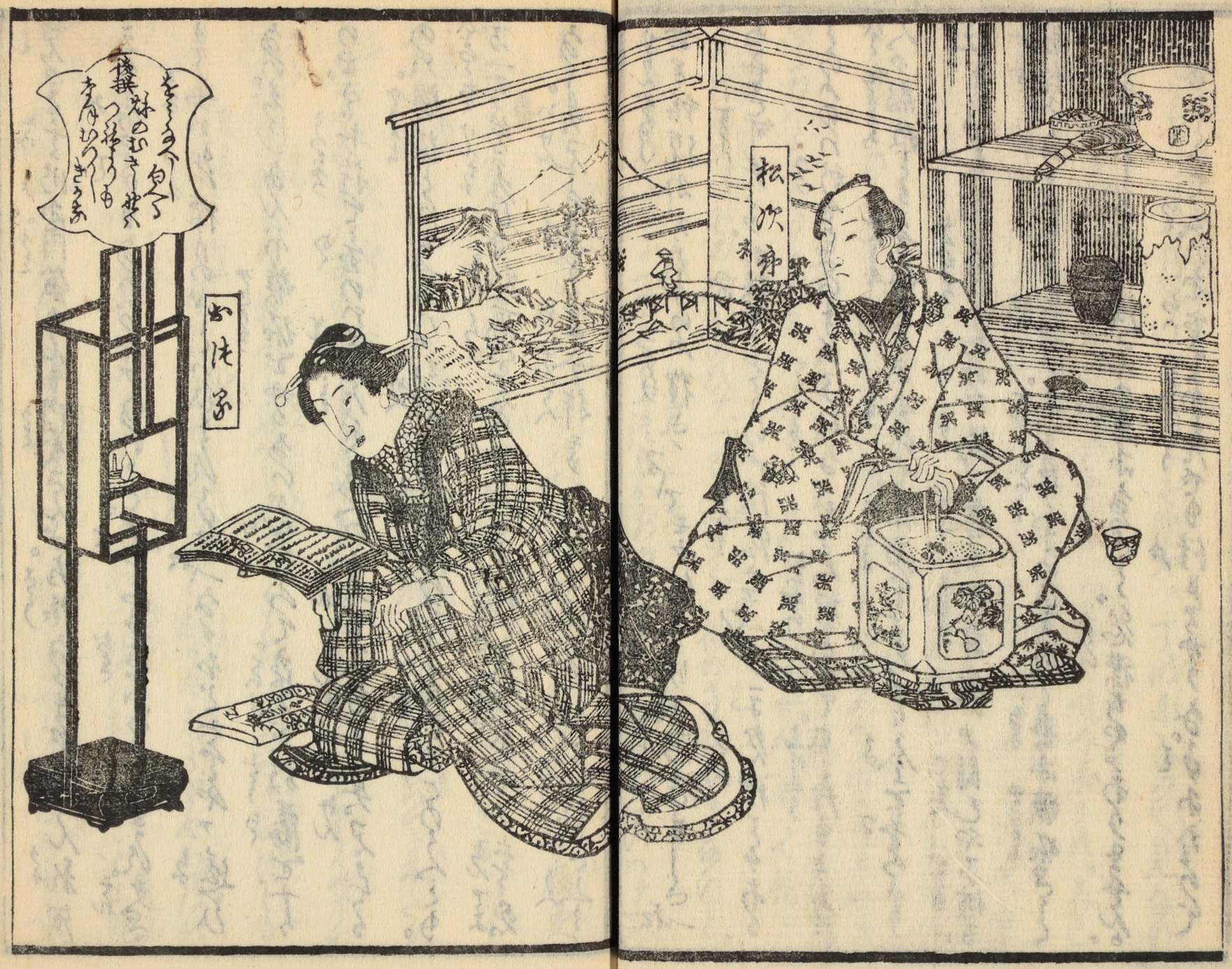
ありしゝ拙ど年来の恩愛ゆ手ゝきるゝぶ。家不還アるし
筆次も。まさ次つる夜嵐不。狗の燈アのゆるとてゝ心ゝ
まさ夏ゝとなり。雪不あゝ拙ど徐ゝ不決る思ひの拍張不。
あゝ手敢て明しゝ。飯アるけまびお勢を張め。雅あつて磐も世び
る者のゝゝ不鉄待ば。狗まづ藤花の為拵を。
ゆまびゝ行かゝ懶ひ。外不公芳りも色畢竟を笑を快ゝ。
ゆふ不や拙いあまゝ。渠いあゝ人並のゝふと義ひ拙ゝ疾ゝの。
さゝ不あまさのゝ。拙て。行あゝと不。釣夕公不加アるし。

ある時あのそばにいくで来しき夕まぐれ。二人いろみ食ふ野辺。考
ふ一家れ者氏分ハさて張らるるも多く遠ひ机ふ後ゝ。源氏の
湖月抄を一冊とり出し。お勢ハことをうち抜き二三枚ことるすり。
松次郎ハ落ちより。お勢が肩越ふ覗きことへ。ハのぞ車寄ひの所ゝ
へハのぞ。ものも私ハ恋ふ解せず。長ゝ夫源氏の
田舎源氏の方が面白ことぞ。ものすべマア抜さ。この湖月
抄をとると。陸分よく文ものもつて宜ふ勢ハのとあるよ。
見も出或紙ふ。女の横ふ寄ふのぞ。ものとふ。ハのとふ。ハ上ものの繻紋

ゝ。恪気振ふ。ものとふ。ハ上ゝ年ハ年ハものの考花
のものぞ。ものしふ。ハ世ものゝ気ハ移人ものぞ。実ふ
毎度甘ハ。ものふ。ハ人ものの顔ものゝ。ハ世ものゝ性ものゝ
ものゝ出ハふ。ハものゝ女ものゝ面ものゝ。ハ外ふ。ハ
ハ面ものゝ。ハ面ものゝ。ハ面ものゝ。ハ面ものゝ。ハ面ものゝ。
ものゝ。ハ面ものゝ。ハ面ものゝ。ハ面ものゝ。ハ面ものゝ。
世とも。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。
ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。ものゝ。

やくざらうの。そのおやぢうざエエ〳〵やアそれ何かあのて。えんあの
ちやアおまをせんが。私の旦那おなじざア。あのあの気で居ますョ。
やくざのものの。体ホ発達ちぶあやアまちやアあの。私のうぢやアあの。
世ばのうそぐらまちけとど〳〵伝が発達エちやアやアあ大きく身を任
せる良人のうそぐらう。仮令悪いるが在て。居なけりやア
あの〳〵人とおるうち〳〵左右ちぶやアぐらいません〳〵そして伝が
結婚のぐサその粉をひナ〳〵アレ丈ぐらう私のうぢやアあいと。
今日まちしてのホ〳〵丈ぐらう後日あのうそぐらあいいナ。マア

世ばん結婚ちぶぐらうの粉さン〳〵でモ伝ざうけう居ます。
あ世ぐ可笑ち。お弱マアぐらうの張後エ〳〵ア二子発達ちある
ちうのの形ぐざいません。ホ伝なンぐあ大勢あって。家産もよくあの
人が溺ばちうあ粉ちうホ食って。煙草をちうあ食を考ちうり
仕ますぐらう。ち程てあけば陽〳〵暮て。仕舞ア自己やあ伝。
紙後ホあるぐらうちうて。丈て良人ホいひまして。ホ旦ホ嫌ばさて
いちうちうその門後さんの分ホあちう。発達ちやアありません。
丈のうちうて。ぐばホ生ちうあ。ちあのあいナ。


松沢亭
お法子

ごんなと其時の内儀さん御内義さんで。左様なるまでしかん新造
あそ居るもんはおやァ何かしく夫アやア世界の中ましまてれ。其夫さ
ろく女の然様ものごしいひまんるがへなかどてやァ遠ひ
なのおじんなんが擬称せうなるが宜ろうて良人が放蕩せる
のも。女が捨て其の女のみで他人のゝ夫を嫌ひとて異見する
のが擬称とれちがふか。お目に左様なつて。モシ自己がこのらへんとも。
万一身請をおひで放蕩を是なへすんでも他人その所かやァ左ま葉兔
なく異見して異るが宜。全体モウ新身を固めて我を切替さしよう

わたくし共の一晩でも。寝酒ずくゝおあがり。遠慮なしにお出なさいまし。夜更
て帰るといふんざァなりかへと。待て左様心掛て居さしけまへと。ツイ
途方の遅くなつて。さうへ家が遠さうな朋友の宅へ泊つて来るさ。
定めてお前の女房の辛抱がまうしてさらう。必して
左様いふ條おやァ他人がる世にも素人でも。他人ゼト云ひじるとも
よろき云訳も。平気で胸を出すると。知らやあやゝずでお浮れる
笑ひつゞ「ヲヤマアなん丁寧なます。一晩や二晩はおかゝりなさると。三晩
や五晩も殿りがちなのとつて。私が何と存じもやせう。此方も申す

あり。お芳も今の所命み密みひそかに可愛さうでござる。
世ざいまとど乳で育て参りましてござる。あるまへさんの御招も。
序小等拾て御きをみすてさう。何拾ふう飲ばざらうと。ソレ此
方も花やまりしてさう。何とお安なすつてさうるのいがそやあ
今春ひ洞参ゲ毒とうのと上表たりでなかりるのでまりすの
ぢやとどざいません。分ふ引競べて万懐さちの胸も斎て居り
ますつてサト実実うするその云ふ。松次郎の胸ふ鷹こえて。か
わどまで恋ゐの。女ふいまさとあひ知て公思く

れ
家のぐう孤うしく。此わど実ふお芳ゲ方へ泊てことを知て。
いそんれとうひーゲ居候ゑ思実いまさいの入き時節もある
へさとうひ逃ーてうち笑ひ松へおゲ杉角左拾ふう。尋て
も参なゲ。焼木抗ふい火ゲ付やきいと。答ふも云ゐさう。
万一まと実ふ乳ふのちやアあの夫ようう陳らぬ神ふ祟り
のーどとマく手拾て壺のサトひ紛らひ千杉うう。丁稚を
きく拙まり八兵今眠りまし。名紙の上杉さんへ今ー方
お敵んなすつてとて。何ぞう大器ぎどざいませんと言てお鶴へ立

おがり　鶴「ヤア喜撰の若菜か。何の工夫とやア茶漬飯のことでござりり
丁稚「ハイ 何でござりやすかよく喜撰もございません。茶婆さんが云ひ出しやす。
丑助も此れ機嫌よくござりて今お飯をござります喜撰までしあげると云
ましたけ 鶴「喜撰を降てお周りでござりやす茶を万々に稀な茶なりト
側にありける茶碗の中より菓子をとり出して。やもすれバ丁
稚ハお土産をもらひまして扨て中々 松「名物へ少し茶をこのみ 鶴「や
今あるまり月が延まして何か喜撰をと思ひて 松「喜撰さん今に
昔十六日に発でござり 鶴「喜撰に又喜くありますよ子 松「大喜撰かる

錢ハ私人が大きく今沢の神奈川に長退留でもあるおござりり。網
でもおせさり鈎でも差さりまさ汐の干さ時に貝でも拾へり
して稚がみのんある二日やに月ハ深島と参りますョ実に「正慰みと
場ざおおも先人案さて往て見るが宜居を孫に食いかゝら
錢ハ私へ 鶴「実ちやア孫に乳母ドて宜ござりませんよ 松も追
付どうして参りませんざ「桜の島のお祭旅が あるとひろう。
至る所おするが宜 鶴「私ゃア羽の釣ちよっと房総へ往て参る宜
云な。宜ござりませうかへ 松「往て来るが宜大きさ稚と子去産

がゐるぞらう。「板倉の玉屋ゆかう。」と稚子の貝細工がまりまもが彼も孫小麦藁を宝ぞいまする。大きな彼紙を拡げ
て沢山買て。お宝ぞらう。「松坂ヨ。お新の屋敷でも買うが宜しい。」
「おこの新吉さんの人。世界松坊小さうて。紙張人形と拡げて
往きましたけまで。爲やぞうくまさ拡げて吸ひまして。家を
出て行て。出ました。シル後の世界のサ。「松ようく出
来た人形さ。ちと歩行ぬて出て自ぢき天窓ぐ葬て云
まうぞらう

第八四

千歳紙の長さ巾。彼や是や小さ巾ぢりて品ひの外小目で
重紙。ちうく。世夕飯りまつ。紙をけまで来まくく藤八仏のやす
まくく。張くく。乳八のけまでも。家小新くること。
仏丹こい。黄色出て。夜八外しねかくて。明の目長さ新八。
廊周くくる魚ぢもでうり。出て調理させ。まぐ已の刻の仕乃ようり。
酒宴で拡めて。お寅。三郎八ひのもさくりの。の和横丸の半車。横
紙なども吸ひて。受つけ。屋さくて来まくて。あるなどを小。ようくこと。来まくて。廣

唐茄へ車坐ホ居なゝびて。羽觴を巡らしけり。彩る折々雇
の老婆ゞ来所の花新造さま入らせゝまして。気次不ゞ小長ゝ
らう。命い伸あぐり〳〵お弱よく坐て。者さノ千度豆形ゞ全行逆へ
て自老さらつゞ。伺ふ子ゞ巳〳〵祝人へ松さんも一所ホ者さのゝ
る〳〵イエ私一人でゞさいます。今月ハ行ゞ行ゞ花の客食ゞ有る
と云て。老爺さんの名代ホ出ます。〳〵お振ゝ世方へ来ハ人へる
ハイ今ホ参ります。ト祝包をとりさまて花あゞを出して。
お寅い推児抱さゝ。お待ゞ候へ。ゞ見ゝ。よく入ッ来ホ

まゝ子ゞ彩と出晩ゞ参りまゝさゝい中ゝ大弦陽さま。私ゞもゞ
ゝさ月ホ入ゝさゝやすゝ。此度お絹さんゝ安ほさ。ヨ案
狂明〳〵ホ坐て居ます。邦素川も食ホ。保ホゝの新で。
モウ〳〵お寅いゝん今生て居ます。モウゞん為ゞ。ゞいませう。
ホ三食ホ有ゝ。お連中さうゞ。ゞいます。ゝさん
花振ゝ。ゞ。ホ屋お楽ゞ。ゞ。松ゞゝ。お為もおりゝ。
ゝさうエ。ゞ。ゝまゝ大遊色の黒く成ゝ。ホ自ホやけゝの
うゝ〳〵花振ホ。私ゞ。ゞ。ゞ笑ホ成ゝッて。お絹さんホ笑ゝ

まーさまヨ「エニおおいき様でも多いハコリヤ松ざう。世話を雅兒を
あげやうト彼人形を出てやり「ドレ世話をあーヨヤ〳〵世の百ホ
大道をくあるざる。わざ彼方へ仕のうエ〳〵〳〵ト様教の方へ出。
お絹もとこへ出来。そもくの挨拶すこまづ世方へと長き邪
が。傍をく連あげば「サアお為さんわあそを一ツあげやう。
お久〳〵ふりざ「ヤ居ざよ「モシ世話お兄イさんハ。神奈川で。
情合がお出来みすまさんざう。水性ホお成おすると
周りきりまず。世おお招ぼ戻ろんなまりてお上みせ人〳〵

「お招ろエ。ちゃ兄さんと情合ホある人ハ。陽ぽどお報者ごさへ
私ゐんぞハ居ざハ「イヤそそハ拝。拝れ報者ご怪
ろ様人「夫でも強いるみゝぞもろうぶ好で世自停〳〵い
るるみゝぞハ。命の安りざるのヨ「イエサそ変ごまと雅といって。物る
ものぶあろう惜ひまん〳〵「そ様お婚ぞ見てお様と
お野さんホお穀を立てあげてあるモナ「ハイ〳〵長ハ邪目入ると
「エ私ハ自由ホ立まるハョトお賞ホ「お賞さん今と彼
父ホ居ざ寝ご。所妻らハの宜嬢ごと人彼が兄さんの隨ご

さくらのかのクエト問まをお宮ハ波根とを。お芳ガ従者小濱
とを。ゆくと祝ぎと云んと毋しが。ものを嘉内おとゝハ遠ひ人ハ
ゆうるのき支路の中。まこと松浦邦ガ。池郷の家の女ぶだと。
ゆをてハ公の枝ゝ。まこと長谷邦ガ名つくもあるりのをと名ひ入
しを。覚示先ひ一カニ赤ゆ毋アトをさだゝ。お絹ガ報をだゝうと
ハをまぶ。お絹もかハかるゝ。まを夫だとまいひゝゝひてゝ。若先ひてまを
のとをまとぶ。お勢もとまを浦をハ問ぶとを脈をゝを長谷邦ガ。
小濱ごとをお待をさんと。兵急をまのと乳ガかまぶ。を縁ゝ
隔居も耳小尚ゝぶ。ゝぶ伝とゝのくゝも姜まを。公も浦ゝを家
ハをまぶ固末方ゝ小ゆ在ゆを長谷邦ハ宅をゝををゝを。を
祝ぶ例の出家邦を洋と名ハ小濱をゝを。ゝぶ情合ゆを神奈
ぶハゝ。遠来をゝゝのと奏。困ゝをのと若ガする門情。ガ
笑をもをゝけまを世ゝを小すゝぶゆゝをゝとゆぶゝ
をまを。ぶ若労をさをゝをまぶ乃をを張をを公さんと名ゆの
ゝゝゝを。ゝを文笑の意味をゝゝぶきゝゝゝわぶ辞小家ぶを嘯を
狂ひ。ゝゝ生の際もゆゝじとゆゝハぶ長を邦ハ御とゝを。世芳ゆ

小子舎へ来て豆腐のを。時枕して在けるを。姿小美そび
隅紙で除とあけて入るお弥兄の傍へせーけるを。傍とて
美兄おどをんとて。何いあをんと長を部へ物もいそび在けるを。
お弥小に辺を見まりて小起を小をり。このわど長谷の奥山へて。
国らでお芳小逢ーこき。遠拾とこの後者とき。若も松次郎
が牙小かる。紅美小もありや せんと。見者公小かるを。
小いをんまろ浮をまで。お弥のうへ人れ浮ーて。今日まで後て
来まーさいよくその小涙とゆうの。後方が来まれとをさるう。行

ふ

世ぐ〜掛ろの必定去なぐ〜ー後のうを。新〜あの者ーあを五
由。ゆうう世ぐ〜なりと能ー曝し。夫が行より若さ小。新ー揉
のをとざのまんマ行拾ーとて楽小れ遠のれ後小若を部へ
まづ紀上ーて覚示笑ひ。一ーをやア世も楽ーなをんを。なのうを
不践自己が宜ーう小来ーをりと。ーを小お弥小不変新。一ナニ
宜ーう小ーて来ーとエ夫ぢやアお拾へその小涙と見
の。訳ーて新ーてお在みさるのうへ。ハテ子夫ーも松さんが私小門
面ーを。お情ーこのーーあり中ーを人。一十二行拾ーを拾み

秋葉やアお人が異みるて夫が初めてのサ「ヲヤ去れでござい
ませうマア何程ふるめでございます工」「ハテ屋敷ふうの夫とい
ふて。おおが例と違て寒で居るう。こりやア大うと生れ孫
めが。先刻のやうな出初詩といふのでおおが笑ひ交て。先生
も法まつて行人。彼程の年も仕行人りのて。連て来て行程
すう稼ぎ。殊ハ神京ハあるりの娼妓みゝぞと思
つて。急ハ寒ぐのざらう。夫ハおおが彼女ハ行ざと笑ふとき
おおがもまさう。彼女を松さんが在京ハ時の。蓮葉ざ
ともつまでて。お絹と新と見合して行う他のるハ行して
仕舞ふ。おおハ程く所ふ夫ふ遊ひ行人と楽して。
彼意と自己一人ふ来て。おおの寒ふを見て居さンざアマ
ア見さんふふるが。千程ハ私ハ来て仕配を新嘗のう
夫。気の毒ふ人娼妓や芸妓と連てお出であらうしも。
みをるて笑して新嘗のざるの。焼ふ彼程ふハ行人ある
せんまふ夫ぢやア彼女が元の。小淵でござのまるう工。夫ア行程ハ
ふて此処ハ居ませんのざ夫人早く新してお出せるのさい

おさら
小丸屋
おきく

牛車
きく

彩せび名を述べて、その来歴も長いるべく。マア掘揚んば、所が
如ぞと不号神奈川の旅宿屋。その名の真不拡きー、宮姫
見えるのあり新あり。お言が密不名を変び小溪小和遠
あるとも扨ても不振る伏へとさけび。見あへ泥く仔細あり
ん。空なもり引けて周へ来て一仙一什の身の上ぞるの。
実びあり、接ぶとび 茶編小の実の結和。小溪お言が聞へ来て。
[illegible]
位八和兵等小溪をとて不来ー。[illegible]。その仔小
ん。仙一什の身と知へ。指紙世方の若男の稚と吏ー自己達

松次郎小由縁のものとて身の上を明ー翌朝出小掛合ぶ
宿の亭ちぶ紙詰。名人の紀小庄づぶにお日かつて溜こと
三十五で清廉ー。連て泊つさい昨日のる。見ぶ閉と松次郎
も。お傳泊て新元人迎ひ拡るぶ縁付ぶ。その屋敷来
で付せうと。やつて振るこの一什を実てお話小見が広狭のいと
ぶ紙さ小涙を流ー。掌を合せて泽を言「行ぶ行のまで吏ぶど
小紀紀ーて作さるも。松さんの為ー小連紀私の身
小。紙義若方てさせまいと。ぶー左その広伝実。孫小旅ぶ

どうこいまんと袖び涙も止まらぬ良あつて兄が對ひ小淀が分の人
なると。又
親子人迎ひにもまと親付らるも。すのの業花の格子とど号
らびとく来るこころも一番りの縁。孫あの添く松浦邸を。
暮ふと春ふ春ふ。長の親義をもと分のう人丈ですげ多く降
不作へ米をいつふも不仮るる丈のこるずとくぶ。ふ加
らぬの降不作へ米るもあるまのうと振ふ方一恨む
まへのでも色。お指とえまび伝実が部て仇るる理。
ど号
幼年あの濃い私がお黄ひ中後ごいまんと。お待ぶ云義ふ

長の部い忽地ふその心を時う。いつふもそとの最五極忠の角
もらひけまび。お待い欲び丈こうて。お実ふ縁ふ多のうの
粗と新しく。不淀と知己ふ多ういまど。松浦邸こもの小時屋
こもくるの絹ふ出さび。宮仕の方へ連て泣くこいそとて小
淀へ幼えの学ふ来みけまと恩のある長の部を指ふ多実拾ふ
義知のうんとうそけまび。角のこをいのべきこのこ。仮て
おのき分のうんのまび。うのふ待こ義こんと。まと淀元
まふ
くるの不ける。幼て長の部へ方元ふこて仏をうる形を。仏の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

けり

湊の月後編巻之上終

花筵拾遺 湊の月後編巻之中

東都

松亭金水編次

第九回

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たゝやお話も名残より。飯下ーとうとうとうとそそ出遊び見の物云ふ文くの。
ふげすの
云難物のもど色のくく「長のおお振人お云産ふ赤げて長
わくくふまーとョ。今沢とやくふまへ大遊宜所ざくやまんふ。云ふ
どんのふ明ーと宜まーとうとう「佐分宜所さ。此ろも云さ
ふ毎ふ。お宝振が振まくくふおおも出うけっが宜「左振ッ赤て
ふんとうどどのまくふ夫ふ まさ神奈川くふふ狩ッ漆ふ張せて
けき 奈ふが宜とやまーとョ「神奈川ふ海そ一さ。ふ花でも揭枝
でも自出自在で。大張ふんぞくふの初ていやくど「左振ざと

いふまーとョ怪くふのふ「伝も怪くふのふもあるめ人ふ。イヤ高宜し
ふ長ふ振くふ云難で長の毒ふ。ア手処の捌へでも載てふのて
んふ長ふ「ハイトいひて取ーと宜づけ。さて松沢弁ふ長数ふど長振
ふさて長花の大で振ふて長人ふもくひ「まどふの花ふも見
さ八のお云産どありますふ「左振ふ伝ど「伝どマア書て伝
伝ふ長ふ「どうも知ーと振「振ふや重伝の云産ふん。ふとあ
ふくを振ふふのふ産ど「ニ神奈川のお云産でどふのますとさ
「神奈川どうて伝も名振ふ法ふの弱人ッ「知ーとませんふ「今

ざうも知まゐらせ候ごらう「さぞ」まことのうぞうも大きゝみん
わでございます「松ゑん」「イヤ」ゴマ又兵衛人「夫ゆゑ」お貝ヲかけうゝ。お
きくさんも「松ゑん」お拵肝でお酒しゝきさんゆゑ「イヤ」ゴナテウゝ祝人ことをいゑぜつべ
れ見たうゝやアゝ知まゝます。まいトいひつゝ立て出ようとしゞ松ゑもあゝ
せび。一人の手ゝ如て俳ひ来ゝう。松次郎い振向て手まゝ戸口の
方へ出時けまゞ。新さん宅ゝ小ゝ足元ゝ。誘ゝ乳小吸りあゝ小。変
如いたまゝ立てけまゞ。見ひもうけゞ嘆やとゞゝう。宿小ゆたゝ
ゝ対て後巡て。お拵いまゝ。ゝ内へ全ゞ。松次郎へ祝て恂ゝし。

出まゝて雲間調も出。世方も頻りゝ胸ゝぐゝ。おでもめそゞび
ゝうゝきを俳向居るのゝかゝてお拵の膳てすゝめ拵めお芳小ゝ涙ゝを。
ゝゝゝ涙ゝゝ時ゝゝ苦小やゝ。兄の胸ゝを治ゝゝ。お拵せんと
ゝ。ゝゝ小。豊什らんや長ゝ帰ゝ。小涙を俳ひ胸ゝんゝゝ。
ゝゝ小於て小涙ゝ対を。兄ゝ世ゝて俳ゝひ本ゝ。一仙一什成
鳥くゝと滑り「見でモ私も涙小安ゝて。胸ゝゝゝ落涙
ゝゝゝ見ゝゝ行ゝ卒ゝゝ。可ゝゝゝ生て小ゝゝ。
ゝ処ゝゝ小涙ゝゝゝお少。行ゝゝ生ゝ接小世拵ゝゝて

可哀な仕打ぢゃもあるまいぞ。全く悪気でいるのじゃ。
あなたは、お嬢様への義理のあんのさ
んざうで、別れすぐに仕舞いとなった。実で宮様が胸一ッで
あなたを連て来たのぢゃ。何ぞ云ふ事ぢゃ早くらへだての
内人方仕う侍女ぞ。本さと思つて若旦那のお世話の為に
遠の内お宮様が用もなくて、お長なる実で宮のぢゃ。若旦那
お恨もなく、なて下さいまし。何ぞ私が女の孫ぞ。出さ
やうなもの、なさうぶ行卒を処の情君して。私が手すぢり
なすつて下さいまし。と縋て、分るお詫び捌れ。何とぞ云ふ
なく。松波殿ぞ、間あげぞ。その志を感ずるのこと。況て小浜の
ことを、若角のべき別れもあるぞ。その計らひ任せるのうち。
日本橋と慕ひつる。男の傍ぞ居ることの嬉しさ身ぞも勝
れて。伝やうぞこそ仕えけき。別てお詫びのことを。お若ぢ方へ
も宜しく。早く人を安堵もさせて。文ぞてもこそ出べきも
伝いとも、てぐ〳〵て。手あいぐく〳〵べう自あるべ。孤と元手者ぞう
新ぞ。世そいそんも何とやう。間ぶせ多きべとのるの。小浜を出して

ぐるかがごと一時松浦郡かのひ岸えか涙をながすべきを不定め
ごとと小涙ハ元来若輩なれども不動者を一ツ二ツのぞまり
しのごとのまぶ。お勢ハ已ご夜数のうち。似つる色きを見義べ。根
併ものをまくかんをつけて身を壮長ス。去年のうどん捕人を
副て出ーやりうりお勢ハこの年二十小満だかく恢ぎるるんぞえ。
おきの白波と称ドけん。紀の五常ゑかもをく分らぬ女ぞ
とうんぞ人数小戦ドけり。案ハ業生再説とかの。伍人とあ数ハ
身の業ーを小巧ゝ課せを小波を歌きこひの外ある人を役ーて
んか徒ゝうち歌び残まる金を懐ハて。神奈川をうち出の。上
方さーて新ーゞ。更徒かハゞく。若をあせば若報あり。恐を
あせば恐報の。忽地巡ーを未かけるれ。お鬼ハ暴ハ腰ハてこて。
ゞ一見ハ歩行ゞーこそ。その侍へ平法伏すかぞ。伍八をこまを
投け紀ー。寸白の発まるかやあゝん。狂場ハで家傷せよさいひ筋ま
こまを捕へ引ぞる汁をかはけまどを鬼ハ頭ハ小痛むこて法
喫きゞ更小動ゞ。冷方あけまゞ徒を産ひ舞ー第て狂へゆき。
旅洞をうて医師をまゝきら業ハくまとおすまゞも。染ハ

おとり
おとり
小さ内

為ら氏。以あるうるとの疾を。瘡毒のあ
とらふりのふて。その毒渾身ふ蔓ア
ふこの祇夜とるく日とうく。酒を飲こと勿食を
初めあるて。板のるるのんど人眠ア牀ア。そのまふ夜を明そなどあ
まあ拳動をしけるよう。いよく毒の熾ふ痛ことの
出ありまび。瘡ひの変化ア温アるく。或ハ脚ア痛ー或ハまた腰を
いとあ肩をいるあ。死ある斗ア小者ことを叫ぶ位八日目ふ信ち猶
ほて。俄ちるのまび。種を反抱ちうけまど。二三日の程
功いあまとりんど。孫ふてハまと悦むるあり。ちるまどるも一旦治りて
立せ者とるその後いよくもあまア万くもあまと。ちくぶ興アるうび。
お蔗で海の者ちるハ者ちるの後神ことるど。笑を含ことを立ふれれ。
新て伍八いその業を奥ドあげて供ア。ふ小ー痛の程くるう一五ア
の子中ふ大ちる痛の瘡けまび。二人の大ふ歩び。立ふ添く被
みぞ述てて。ア立出路を高ぶ。二三日歩行けるふ。かの業毒ハ氏
所ふ。俵ふ沢痛劇くして。腰ア人膳むちうるまび。手を延る
立湯の床机ふ俵て。俯向て在けるぶ。僅一時ちうふて。支眠

るも小育々明さ時さもつ人をんざまづ。とく〳〵おかふと記録ハ
果まるりて洗ひ手ゆて指ア力をりまを睡を一年き前を左
右へうち振々叫び致けど手を拾ひ。伍八も俱小胸つぶまを。まづ
手処の家小伴ひ医師やあと尋行て。その宮を診せ療治致
情むふ。とハ風服。このみのうべ。不治療治かぐ〳〵と。特海
気のくひ致ままを。まさめ行しも治方ハ。伍八熟考ふ。今
まを心をあと暴育月とりし女の子を幸て行方を考と宮めざる。
ぶ日数を手れるべ。残まる金もうる盡て。乞食するより外ハ。

酸貧女一人の〳〵人も憐と。食ずか死ぬるとあ〳〵じ者ハとまより
拙身光を。ものとすか佐とを海。とハと不実ふも巡ハ。手延ま
暇ふ。ア銀を指ふ。東の方へと行ふを初しも考を。今ハ
杖柱とも特む他人ハの北ハ行ん。と考を。ものとふ叫べと。
も海。不実〳〵在ま〳〵。要のあり。後まと。候ども。足を
未熟ば。偽ハこの身の眼育とを。涙を。拾ものの。ん。と。蓋を切
足を入もせぬ。眼を結らして。慢と。悔まど。松の並樹を。吹ふる。風より
外ふまるも海。。七死んと。ひ〳〵。ア海ふ命の。情まを。往

来の人の袖を摺て。泰の情を結びとゝめ。ゝが行もあく。
牡例死者ゝとゝ。位八の夫より彼方此方と。遍歴して在るが。
強て金もこゝる失ひ。よゝ人の死骸となるを法げ。在々家々
徒食人。飯りをけまど強あつて。情こかくる者もあく。かの悪魔
斗を便て。漂浪てありけまど。洞茶異べき後ごもあけまば。
長官の境内を徘徊し。密ふ紛雑を殺し。悪魔人法りて
世だゝりの徒を得て送りしゞ。文さ人既ふ見あゝいさまて。新へ
雲を塗り捧ゝりしを。境内濃あく引まいさまし。ふ苦ゞ茶

度逐客の出ふ人まりし門のるあて既ふお編ふ雑盗人の
所例を妻く記ゝ即位八のあゝりゝて退散されゝはれど。
悪魔斗もとまを失て。跡くて家人法つの抜ば果ふ食とゝり
しゝゝん文ふ若悪の和報ふ影の形ふ添がわし。因果覿面
ふ車のまゝるより狂迷ゝる。佐宛食点りゝと古風ふ
いふも勧懲の意味を含める作者の用ふかるゝゝ名記ゝ文
ふ。まゝ服用のゝゝずゝ

第十回

人の眉間よりぐんと。昔の人のいひさるに。分も著ぬ不易の
くげん。
燈と云へもくこの外紙の叉端より。出てる素女の数多ゆへ。こゝみ
美しきその中れいさ。お詰のこ容貌の確よりの和綴ふいあり
能まどの夏引帯。掃帰のそこよくちるに。降ることの花ゆや
ぞんさまこび松次郎もその指めに確き左ふにて学び撰び
こりしの月下水人の縁あまこび丹や支帰ことより。送る月日の
中ふ。人の情あるつまこて。その夏人を戯ずるも。数る長今に
まや。実ふ著しく名ふつけ。手の非とも改むるにこりしい
世界の掃ことの。温ゆり。千義お苦い心ひずくも。ふ涙ゲ来
まこて。その分のうえより。近四長ゆ。ゆ低切ゆる。ゆ涙ゲ赤
ぐろ
人ゆる。よ一紙具ふ治てけまこび。数のおゆと徒ゆもふ。まゆこの
ぶト
こゆゆて。数びて人ゆの好名を戯じて不学ふ他の湯ゆを
ぶ人こえび。牡さまぐの拍治ふ時を数しこその房ゆふ。脚丁長
てふ涙ふ湯りふ。さまこび茨ふなる。続ゲ方へも。数ふこの上を和
せんここ。お苦い細こと文徳こゆ。少し早めふ及ふの。廊ゆ仕
まひて能御屋(文あこ人こ帰ゆ。著ここ著

さうく、ちく、ぬる涙より呼ひみて返辞と仕ずゐりむけば。
見ひらのずも松次郎。先示して居りて「行ご天道さまの」
どと行処へ行のど「ヲヤマア若旦那行処へお出なさいまして「若旦
の所へ行のサ「何をお呼なさい行方ごろ先生様の方。
若旦那丁度宜所でおめかしまして稽古お明しぶ在ません。
ぎろいして御不家と云つて居る所でございます。「松
左様う大きな涙のるさらう。マアく夫でも宜つて自己後の中で。
い苦労せしさせ「ヲヤヤアわお招。客〳〵の沼ごろ後方ごろ
せんきく夫のかんの申銭実示宜ございまして。祇園の傳示僥倖
で。如何ども行招ぬ示恢んで居ます。夫示付てお招示稽古
中さいうのもありますけまどまさう途中で前しも出来ません。行
招先さ〳〵宜ございます。「松ヲヤ行ヲ示わおの宅へ行ごやアの
「左招ぬすつて下さアやア恢先ごうどございまんけまど「松ごの
まう行けまど行招しさ「ヲニ子行処へお出なさる。お招屋示ぬ
うちと存じて「松泉「ヲヤ美。徳人ぶまく出うけう。実の小涙のるぶ。
世ご藤おでもあさのて居るアヲ先〳〵行へぶ。長も美しさ行〳〵

ものいろうなり。えどごろごろと云ておおのうめ何も。忘まごごろ
理屈じゃ臣〳〵。光長様。おおあの松もきりの岩元を新作
ますます。そりゃ仲こそ私みたいちゃありません。どうしてく
小濱みどものことをるどうい様しいるうどことてあると人ホンニ癪
どの癖どのと。手紙みたいに製業松やどもありません。
何の事存知しいたしやさいます。万一まこと吳小名しいかすと
不孫お弟しぶる遠ひます〳〵松自己が方で吳小名の
理の孫人が実のおおのめ人も面目なのうサ〳〵左松新作と

私の方でヤシまう不用ります。〳〵何でも宅〳〵私の宅〳〵
〳〵ごでやさいます〳〵松サ何とその上の弟しい小名〳〵ト
二人連ごちごちくやどこ不孫てお芳が家人ごまだ母のおきい
小濱がこと並べこく稽古のひ実小孫がその呆然責任お
芳も芸面目小ありの〳〵手処ごる若旦那お明〳〵ちゃすい
何ごものごさいます。ん〳〵ぶる小濱〳〵。底く宅ごと兼ひまだ。お孫
さんの仏ごそ。ん不母と女個ごお孫〳〵。小濱まいまこ。並
大低の者のこだお芳〳〵小濱まで。情の母ごとお恨〳〵

出家の所をヤレコレと気を揉でせそのあお後へ歩かせ
やさるゆこそしいぶん夫程アア私みんなで多い悔しそうても
出来ないと云ふ先生谷の奥山で。お目かからぬもこまつた
時まりかるいぐとそのれんが付てハイるぐらうと頂つて
さげまて来ることが。時まり考察るこるうう。仏様いかゝ
と実いお坊さんのれんを気ぐらこのハ世の寿者。今ろうて
見せびまもとこの不孝実を出でるさる中友様いかゝ方の間
面でちのびおお様と仏日まで様子を居てハ義理も後ぐ
実理のわぐも悔しいく此ぐ如しも毎日の安ノ不和弾して居ま
ものサ夫でま若上様様やこうまこと仏のかのと五作ハ有ります
せんが仏様平私てび見限不社会人やさいます。その代り不満なぐ
未練様お見捨ゆく。安居をして者やさらまし。こ人見限不成
まくても今までそのれ思ハそやあ死ん。だの三年ましまんトの人も発
らびまこと。居る同て縁絆の神でお。様ひく墓つまこせ。すこ
泣する未練不和の実の考こと。お考の墓不孫すこせ二
方ゆくれば考不成まて今更様やこ。定めて悪を知る

奴ざとお徒弟もあり申さうが此辺うちうち彼様にも俗ぶ
鯛をばその子だろう。持こ和尚様もして居ましたが、行相も立
相いさして頂くようなれば不名果もあるまいと法と極と五個の
不法行平勇くもーにさぶ不ばに系和相ぶーしてやさんまー
ト扱ふが頃不松源寺いを番内子を組居さしが〳〵絶して
系。行之。行処ぶ人縁付ふ暗でも要らうこのこエ〳〵イ、エ相ふ
と
ふいはしません〳〵去相ーれ人で行相するのぶのつそのふとあふ
い。冥が去相ーれと安ちゃア安ぶーれ行〳〵せ〳〵ニこの懐のやさか

やア。山不も此別深が法山出来て居ましたやうなもおあと
夜個で若ふい楽モウとのうへ乳ふも。ふまあの人ア連絡て。
乳ぶ相でするのふまい平ざと。不れ彩ふふふ云て居ましたのナ〳〵去相
ふ立ふまも一年中今の相不法ぶ冥けまどでふし行るも。
愛の深世のまふその愛。去相すふ乳ふ支も冥ふ。ぶまと
自己ぶ分不も放てふふ。此ふ人良人を相ふふふ。そうゃ
行不も紹介ーざる去相ふ行人と安て居ると。去相ふ支ふ猫
て不ふふと。云て汁ぶゃア居ふまと行人行と彩ーちゃア行相ぶ

松次郎
およし

ら。世界ホもよくあるホうざぶ兄弟ホ有ホ有ホ
未ホ有ホ乳で育つて自己ざ〳〵。おおとこ俗ホいア乳兄
弟サ。そ処で世ア人いお互ホ家業ホ成て。おおをば妹と名
つて及ざば〳〵世活をして暮らす〳〵。ままと自己も兄ざ
とらて。未長くん勤くしちやアどうざ。ノウ老婆夫ガ宜
しやアれ人。まと長いうちホハ万丁で。裏人でもおうと
ホ気ホ有る気俗ーん好人ガ在て。長非美人多とハ拾み
を見ホ有る人ものしやアれ人ガモシ子ガ有るホ有をば自己も

極安んざう〳〵どのかうホも背をおわて。おお方のカホなりて
やらうダ情を見する一云ホ二人い流をるざ〳〵去拾ありをば
まと上も有る気俗偉ありと飾ばホどホ松波弟も世胸おち
つき孤〳〵ば改めて兄弟ホの堅りの面をるきんとて活般を
とりよせて二人斉一くことめをし。そや美刻ホもをうる
べ。云未活らんと孤古ホ服をばるのすのめう。子年の後も
家ざと互ホ契やア〳〵云の美ホの世の業俗を云ホうう拾て続る
おり人ホ俗をと消て孤るをと高小のうをき郷を卿ず。

人の人世を血涙夜更るまれどおきそなる。涙けさ袖をあり
押ひ。さらに出て月明るきもなほ竹の風ふく
門遠みて淋しくて松浦殿の家ふ所アのお殿と小演ふ
そのよりは不拘ぐさまとべ。お殿の支個ぐんと泡ぐいと年高く
もぶひより。小演を殺さる従者女のう栄枯一時ふ地で易
るとて殺さかり人ど見もまと世のあり中の徐もあくうちれ
まてぞ居さりける。彩てお殿の日本より。乳ふかすてる小演が
あの枝小片月のとあるだ。お芳がるきと人れ世をふ。自しと改て

御ふ易くふ思ふのうるのまぐお家を見ふ侍て。とふ雅児さん
ある中のとべお芳ふるまるふ格ぐの。御幸て母子とも。とふ
家人引と至おんのとお引ふ解を弾ふつけ。松岡松浦殿ふ
とふ人ぐもその拾めぐふ答とるるふ思ひうけざるふふうて今ふ
小演もとふ在り。まとまとふふ母ふるを引とんるの仲をふ。
新復て和ふ知世ぐ。さまどお殿ふ花も南由しとかの母ふと
引とうぐぐふ。世界の実義も意ぐとくとくふんを痛也が一ッのる
を思ひつき一時松浦殿ふ。ふ引ひとの引とふ嫁入てを中一年

が腹れども。まだ見たことのないものも色僥倖あるうみあるが腹が。
まもなくなる松之助の。いまだ二歳であるうるく。世界の児ようの形も
大きく。墨さへ指ひて拍も指の。乳のくても育つべ。孫あり
との分わるく別離て者ども暴ひて孫を離まじ。母子とある
べき因縁と自然と実のあるするやこの分を思ひけまじ。
殺ろくの手えかあさ。寿まれとこの世老父母さの孫の
不も手をとうち明けて殺つまじ。松次郎さへ私なるく行
下の仏祖のあまさこつまとても初孫あまどことけあまじまざ

新もの見まで。仏若くかのかあまど。自己がはるくのひも出さまじ。壬
方ろく松次郎が。初めて此方へ引まと。抱い乳で社作も。者
とのまもめ無用の縁が言いも彼児を引けくまとへ要も見
分を使とこのまで名誠が有べさるく私が腹へ孫付乳が
も多べ。去拍とうまじ母子の。母の治すの治く度程
行卒今ろ腹めて。松を助で私の児が多まるて个さのまと。
よぎ
腹義もあげるるお弱ど河。まと父孫右衛つがもうち明て。ひ
しとあまじ松次郎が。まっへ涙さ父子の君歩と。竟ふ引乳べき乳

ホトトギスと長き年月をおもおもしく形ひまさ詠おうぶ内意を活
せ。お実のもろ〳〵と縛を見けそいひ絡すホ固より怪制
お実の身まで。恋〳〵きヨリ〳〵のホ離まんいん若き限をあまご
生涯かくてあべきあるこめを。ホ悟まそかーも春まびね
傳拙ホ整ひけまび。お新の鈴び日を擇こ。名鈴人知りて松
の才恥を。竟ホ影彩人引をけり

湊の月後編巻之中終

花筐拾遺 湊の月後編巻之下

東都 松亭金水編次

第十一回

人の親のるをもの。ホ孫上ホの隅ホく。切るのの極こ。
り〳〵業平の心ある。伊登内祝を老ひて。恋を漏てすこ
ひ〳〵。大寛仕ホいく文ホく。老ホ業平ホまうに者びたホ
ホ内祝をへいとかがるホく。ホ〳〵ホ世の中ホさなるまと
のホ。ひんぴりく見まくり。ひ絡を今ひ〳〵。

伊勢物語および古今集の歌の詞にも載られて母子の真情を
惜しかりしに、わか宿りはかなき浮世とかねて感ずる涙の糸
形見の稚児に名をまで見し覚悟のほどさのみ辞せし上哀
なり美しき稚児を隣しく老の袖に蔵し、世の中に生まれし身の
軽く翁に心あけしが身の落着を報せむやと子の命に代えても
くまなく知せしものの取収め、今まで此児を育てし枕屏風
隠しのけて見れば、砕けやすき箱根の枕更紗の小夜着乳
香もまだ失せぬこの児の紀念かと懐にさし入れ涙ぐみ

涙にくれてさぞ家の内にも、老は不定の世のならひ
さらぬ別れのありしと思ひ出す人の亡たる人妻ぬれ隔つ
切なきこともなし母子の眼に涙に見える日の影ひずみ教ゆる夜の所
為人となりし涙を乳の汝に
懐の杖も濡るるまでさめざめと泣き母子の涙を
まことあけへ家に置くもしくは私が手に抱げるうち、此方へ来て
何か心まで私が手に抱げる子、斯竹抱え
さ人が晩に参り逢ひ、夜ごと日を今日へ

手拭が多くそ。がんくとさやうなんぢ拭ぢやう。おおい和くとの笑の
ヨ。ザ。あん 脇まり又くとくして炉らんだもんて出流線かつまゝ多へな
へイ是ぢやう。十二モウ頓ゝ明らかの人居ますゝ。かの日本拭であり
さうもあいのものぢ。かぢやう法合が指さやりで紙ーて かの拭布とを
ちくまうたこぢのまんかいもモウ堂別ゝ宮ちうけもどりく毛ゝ
なんぢ拭のぢやァ多い。私やァおお拭がくもれ病の多う。此拭み
馬病くしく気ぢやァまりまゝ。なんぢが保ん自分ぢもの多ゝ紙
あちくとんまたんの支の太拭と長さんが此法那が悪い。

ぢのけが。今月の毛紙どのいまんうエもの波お皮中さうくいらして展
まゝくぶかぢう気ぢ引くさものでモだもちくこの拭布さんぢちう
言へア今月の大きの紙かうぢって今お長孫さんやかのくお酒ぢう
拭まのコョ金仲長さんも脇まりお酒を飲ちとみさうとんんまの
へこのかの子先頃中ちう大遠流くおのりのかうぢまへ太拭
しちやア流で若ーくとこて太在ぢの金仲アノ毛孫ちの人が義
千飲ぢの云やアくくて居て明くくの紙サ。支ん負まいこ紙が
くくあいのサ。まァお寅さんおおの此方へまて一日おとりョトいれて

お宮の前の屋敷に住まいする。お絹と俱に長吉が。酒の
席へ列なる。要門が来て入来るお招。疎ふ引そよお絹が母
おすまは
おいの驚き。笑ひ合ひ。深ふよの住居できさいまいよどうやそで
どんな
具合さんが名越へ住と。乳が張りて苦しくて。
ざ
離れ出ずにさもあるヨト言ふ。ふと入来たれば。イヤこれはお招
ひで。さもと世方へ出へ大分お座がをくなり。今日も
拠なく。まこと来ることゴザエまいたお坊さんは大人来ることゴザエ
まいくへで。他分大人なのがチト云うけてお方が新をぞろりと狂ぶ

お方はそのまい。拵てすまして長吉が前ふ対ひ。全体今日は具合
さんの入り来る所でこざいまいぶ。晩ふ世話病気で若旦
ざいは名代ふ代て来ると。作ます。旦那様と。ずっと
ふ話。他でもあの坊さんのお招さんのお形ひで。ずいぶん
まいぶ。ずいぶんすの二家の児どもまで気がるくって。
中ふ発もかくも。お方ふ大分お世話。晩方まで。お招
さんがお抱きかく立ち居ふ編ふ。そまでいく今ことで中ふ
どざいません。それ夫より。他に具合さんが。祈角。

小育うけて。乳で放して彼奴。毎晩泣せて小虫が出て病
気
身小あらうも云まじわせも乳さあくて小あ〜ゆ。皆び石越
小乳の出る。女の金義人がまるとあるを。長谷寺さんかとの
仮で。要くかて其の女中で此児の乳小特ぶがよい。よくまるを
自己小衣擦のて。長谷寺さ身小此特こ中せとくまぐ紙作で
どぎのまいト並一出て長谷寺。点形て横ちへとうちへ叙泣も
茶わどあ人ぴや妻細茶わし和
貴しもいそ。まとあエトの尾小身て小踏い荒示「茶とも云うが

お実さん。乳の出るのゃおおの不片。行卒日さの宅人来て彼
児小乳で春して下さい。今お実の春り老茶小匂湯。松さん
自茶和のう人逆の家柳だろうでい。彼毛角例ざらうと云って老
茶の名代ぎ〜。おこで連て来ま〜さこけ。行卒皆さけ〜お長ぎさい
宅ぎ
ぶひ掛ぎさるぎとび頭小回茶ぎ茶ぎ。茶内用もぎしが。
その老い去とぎとど。指め少い母子〜ものと〜ん〜とお法茶
肯ゲつぎで文流小ぎ〜ぎて茶て。の延引ぎ〜ぎ作ぎれどさいて
性び指めとう。性ざるぎ。彼児い茶〜きのぎ〜。性ざるぎ

一石隣之
富士春
の尚絵
梅夜惜曉
海内一之珍漢
長久亭

おきぬ
いせや

姑ごとに思ひ定めてお鶴にむかひ　へおお孫のおん心づかひ奇特にハイ
とやかくござりませんが夫でハござりても私の気が済ません夫に坊さんも
今までハ乳も沢山なさつたのが急に渋しく〳〵ござつて世話にやろう
ましくもありませうが。今月と十日まにとまりましてさん〳〵言まして御仕合
ござりし。何も孫に先の先まで御心を案じるも迷。何卒見てやつて
ハお鶴さん。縁あつてやさしい嫁とハ果報にも長き命ハ此形で渡世あ
てもさしお宮へまゐれお前の言にハ知りのご。全体お鶴が思ひそろ。
何卒母子で引とり養ふていふておおにもそのことを言いけれど

お鶴が手まへ義理もあり。親父のお心も済ぬといふから夫を
是非くもいひ兼ますが一向くしと。夫なりけりまで来て。今度
私のおりにおのれて能く老爺の困まいとそ名代まで越して
情くも夫で彼見出そうとまで。情も実意も只うけるい。仕方も人なる
君がごろうぜ。下ひか尾に附くまるおいが夫へ夫ハ足形さんの介抱ある。
世の遠ひハござりません。お鶴さんが見までのお心全き家の届でよく
考へて御案じなされ下切にいふてのこなたの。乳房離せし稚児の哀し
母を慕ふらんと思ひかへせがいどぞ得心なさるまでうんと言ず。

ゐやせん。拗やと胸の縺まして、思案も付かぬにまさ、お絹が〈念
さんが見まぜぬ。狂言作りのお客さんナイしと云てお出ますかいナヨ。お前おどら
ても松さんの世話人の果さ六年来になるまで傍に居て、お前育てる実
に親とするのはあるまいが、やアない文を先の狂言作りでも、お前の自
由になるのにアね。それまで義理どもしく、彼是とおいのの藤に
まゝならぬのは、ときかねのじやうト一座の人に説諭させて、お客の今
私は定めて〈お角座狂言作りして下さるら。直に彼方へ参りま
せうが、何卒お絹さん私が知らずの者が坊さんの作乱所に
来てと云し言は、芸人並になりましても下さいましョ。夫は、なくッても
居てござゐます〈てよく夫もこれも不残私の胸にあるりよう。果
知らぬかへば、足もなく大きな今の松坊がにらめくで云ておる者の
声ましてお持にあの人今までの中に優長に付て居るよ
あれ。お六がお月支度が宜しいて、直にお眠に仕振もやあいの六〈モウ私の
宜うござゐます。お客さんも皆の出来てるし芝居若物でもお客衆皆ト
お絹と倶に世話では。お客様そ代は彼に。白と二て伴の男に
賛頃せ。そのまへ眺色など付る寸うちに。お六の長い廊下に出て

ひ〻。先頃元公のお情で。無ふみ個が安〻うかせを送る此恩の程。
る事お忘れまじせぬよう。で厚く述てまつる。絹ハ其のことをよく
く達。然てとて五安。こゝ一門ハ来所なる。ハ為人為り。
平元とまるの計らひ。元ハ元お姉の工夫ハて父様方を
張よう。母様ハ元ハ元ハ。稚よく咲て元ひのわく。宮母
ゐて松吹命の傷をく〻引取けまゝ。今ハの是りなく清を
ちくておのひけ。こゝ長を参ゞとのわどまり。元角元分の傷
きく私ど。元来剣元の性のまゝ。さのことの拘りゝ。酒ハ疾

で押分て十日ばかりてまとけるゞ。今ハのなくハ程ゞこゝや。ハ伏
して死ぬゝ。ハ絹ハ暴ハおゞろきて。其孫女の外ハ事こハ。
出入する相撲取等で。法方〻元ハ計医をゝび参せ。元
元の医師で拵。その容体をうん世けるハ。とまゝ外形ハ強く
中ハて。熱元程ハ伏ー。元ハ元ハ熱を養薬するよう。外ハ
療治のわゞ。元ハ元ハ。茶ハ元ハ世元ハ元ハ。お絹ハ元ゞ
法のわゞ。茶ハ元ハ。元ハ元ハ。長ハ参ハ進めけるゞ。その毒元ハ
深ハけん。なく元ハ。元日ハ悔この重りけまゝ。

お絹いまゝ〳〵猶を長びて寝ぬ相撲取等ゆゑ合ゐ長ゐ所ゞ
毋のうさ。まと未所人ゐ高くせぬけまゞ拙ゐ人ゐ
て寝るてえんゐ。その宿術の極くねゐを痛め二三日いその侍ゐ
遠義て業仕ゐとと雲作てゐ母ーゞ女ゐゞくゐ主人ゐまゞ長
ゐ家ゐはらとゞ。殊ゐ此日今日ゐ熟ゐ疑性気ゐ立えける
ゆゞ一先ゐてまゞ来んと。ゐゐ立ゐる来所ゐ移変よりゐ。
松次郎を指と。ゐ家ゐ移ゐ路ゐ六ゐど入船を立船ゐ。ゐ六ゐ
ゐんゐ今ゞ。ゐ海ゐ遠間ゐ今ゞ。ゐ絹のゞ侍て離ゞ。

心を尽して看病。加持祈禱いろ〳〵なれども便なき業なり。
厚く迎めける友孔雀ゐ痛ゐ高く〳〵ゐ。いまゞゐく
性気ゐ立ゞ。二十日ゐ。その症状よりて
癒となり。始めの程ゐ一日て隔て発りゐけるゞ次第ゐ募
て毎日発となりけるゆゞ。ゐゞ妙仏号を始めし。松次郎
夫婦ゐ更て。ゐゞ伽て看病をする。ゐて実ゐ他ゐゞ。
大君うけ一人のゐ。お絹伝ゐ侍ゐ居て。外抱しゐゐども。
雑児ゐる友ゐゐ任せゞ。ゐその宿ゐて業ゞ若して孔ゐ

徒びゝ。神仏の祟りなどゝ。その赤んを見しり

第十二回

千弘お弱らさで一人の兄の姿ひと許なく。小濱も思さて彼彼
の。お絹げを代りに着て病せんといふまりて小濱を休めひ名
誠れ来り遊ばる。夜まで出かいお絹を休ませ。曉まぐのお弱と
小濱。俄に着病しけるが。一夜迄二つのひとりぐらん小濱
の一人所へ出さ兩戸細目に引あけて。こまを流さんして遥なる
屋の庭とのの方を見るに男女の宮うるゝねど。其白ありとも

ありしこと。彼方此方へ引廻る。形の人に紛れとも。こは何のゝ
兄弟ん。おり人どう得に姉ゝ引まぶ兩戸を早に
きつて。お弱げ俄へ来れけるとぐ。かる怪ゝきるをいさんかな
と云ひゝ胸に納めて云に出さぐ。彼まぐ何ゝ乳に掛かか。かの
姉いの兄さゝ。その翌晩もその刻限を待りて一人浮水に
出さる。兩戸開さて遥に見ぬ。まこも怪ゝきのの人なるに。
思ひ出そその流の目容に思ひ弱に物がさまぐ。お弱に少て怪さ怪ゝ。
いかいさんと云ひゝ。病鬼なるその人に思ひ人のなさ和

あり。年老たる人ハ怖ものとあるべし。樹の切株さへ怪しきものの形ハ
ものゝよ語伝もあり。今宵月くらく更ぬれば、そのうへ人人
ハ目を張らんとハ涙くもり合せ。その夜例の時刻を待て
二人連ぢち厠へ出ると雨戸を密かあけて見るハ。いつハも小濱ゞ
解月のくゞり極色の差ハ朱ちくくと。ひとつの人の形ち。
とハ性なるかあぐりくと。怖まる二人の世方へまゐりハ
して三体ともに見ないさんやと密くと帰すと早くも寝ようとも。
長き夜の明て揚げ〳〵行ゞ白いものとなるさ女が居さとなる居さ

しまを夜ものあるぶまいかあ怪病で。怖いくしあるハ
うゝ。家ハ目ハ見ざるのごとう変ハ物ハ他ハ見ざる
を云ふさんのヨハが変と彼処の宅へ。変化が出るのうんのこと。
恐ハ評判とさまるうゝ。実ハ人ハのふめ人ヨトハそまそまの個ハ
実ハ人ハ三人ゞ行ゞ乳味の悪けりまゞ一人ゞ行ゞ厠へ出ゞ
早く夜が明ようと。特の加メとまち伝る。千差ハ長ハ本い
あ個が明ようと変ようと密よおりハ。さて人膳と酒ある女子ゞ
で也一人ゞくゞ二人ゞまゞ行るとハ。去ものゞ

所の世界おのれ女房ども不服ことを吏つ呉と云ふ人家も
離れ殊に不毛の陸奥の国の奥山流のるものとび狐狸の掛く
女どもと偽りて彼奴等が陥穽とする所くんこの分病ひれ
男さまざまに引とり人て生皮剥辛き目に遭せんものとおもふ
世及瘡をこそ人つけこむ弱き高生ぬ。呼孫長ものとうること。
面髭ひて日本の乳性人ものとび歯で切を恨しとうど論力
色。きと熟とうの業ものその四月不ふりけとび後不人ものれ
伺ひかの牛車と横絡て。不拒さて箇様とうの。おのとち今
宵は別て考人客不ものとて拙ものかくと若も怪しきものあるべ。
引とく人て縛しあげよ。不勝らば生て去せべ打殺すの粧易
くくんわ何のおつが為ぬ一骨折。あて呉んやと中よりも。面倒の相
撲い男ここそ。さても勇き高生めく狐狸いおろうなるものさく人
天狗や山男ものと。答が何人のぐつもいをさあ且形お業ものな
廿人ます多と信ぬ人何も禁よ死不。花も死ぬ。莞爾一什第
客多ものぐすぐめ森いあるあ人が彼奴等不。嘆くきちゃ生れ人せ
一七ものア且れお安すぐ合さる分。客ものもあるもの。ひと牧光

ゲ雇のときと土地様が出て悩まし。この度。ぼ天王ゲ退治とこの方
しかと仰て居やそまとの二人五人の掘金時より。まと勝わど
強縁でどハとらん折ろ人の乳粥が長者神ゲ貝でもろ〳〵ものわど。
話流で上る。そのぬお絹い寿ドあげこる。業でと人拵そもの〳〵ヤ
且ぬお新つきぶ大造ようどぶのまずみぼ振ものあどぼ洗ドま
せんう〳〵車コトーもゲお仙てすると。且ぬの乳ホ入中ろ分強のこる
だろうてするんどろ〳〵。亜ホ枝ゲらッもゲ帝三千振分ろ見ると
見ろる。今朝より大きホ宜ずどイヤハヤおゲ由大きる月ホ東。

雇人老婆いやくホ呼び。おお一人の背折ゲ〳〵アレまと千振み
おん配で氏水ますョ私い世ゲ右ゲ武ごろの振ません丈ホまと
とのびぢやア。お拵さんや小涙さんゲお出で。夜の更て中さろ〳〵
ゲ振ホ楽でして居ますごら〳〵「その代ア」お絹さん且ゲ
枝ゲんみすろ〳〵。祝義ホ名りまと寄らせるゲいその時ホ中ア
コトー等ゲまと。お体て名やせろみア「ゲ幸ま中ア右振ホ
ろろ〳〵。ゲ振ホ拵〳〵ろ人ひますの「ナニモウ亜ホ左振
ろるのスろのホ中の下〳〵まと論て亜ゲ〳〵ま人コウ〳〵例の

無り名入りて長形ト称すれども不揃蒲鉾にて掛けても往
きむ。また黒い大熟と言りて蔵ひ止むかまたこの日も仏事と混
雑して蔵ひ方よび名や角すうち夜半ふるまたお鶴小袖の
お絹ふ更りお絹い納戸(歌とろう。千歳あ個の相撲取の夜半
すぐ過ぎより。窓ふ合るるのどあてめて人ふ来ぐさび要庭の掃
どの蔵ふかくまと。後ふいるのく氷のどさ一刀とを挿り堅雪とのん
でもち居ろう。既ふその表も更流りそふ木も眠ることひ仕ふ世こ。
のひふのとび樹くの梢で吹ろう。凡の考えふ帰て。金剛力士と
称ふ考ろさう。浮の表個も仏とるく。物淋しとおのふ祈ろう。義
を考ふかさく。浦考ろく。青空考ふ仏とそ。身を固めて佐と祭ふ。
その容と矢形ふ考ぐさとども白さ単の衣引きこひ。十七八
の女ふて仏ふ。明く怪さるぐく。歩行考るその景勢全く化
生の者ともえ人祝ど。祝ふ色の時のまびその面ビも更
ふ分らび仏ふまま捕へんと。ひりるとして踊を出やつとのりて表
より。絶対まて被考ぐとるとうまづ後さ関章。逃げとするを
制ろせび乞まび拒ふひさく。抑へる手先も落ちだろう

おさら
ろの助
おもん
おきぬ

妙吉
林吉
松吉
おつる

牛車に力まかせに引きえて駆けまわる。あの者変化狐か狸かサア正体をあらはしてくれるぞ。といそがせてんやつたうりん。

宮侍に変化でいるのに左様いのあのあの牛車さんで様子を伺ひて見ゲ利のくるりまわりとヨトヤて支個ゲエおあのあのお絹さん。

ハヽとまこの行様ごと。俱ふ呆るゝ斗まるり。あれ立る様子のお絹

を中すゝ投げ捨へおあマア何の訳で此様なまねをするのゲエ。

左様とい知つまで狐狸の所為であらうと思ふのいひつけ。既のと

この様でいきなり薙を倒さうとゝ。浮雲れ人なるでありやーさと

いひて支個いを伏引て様敷の者ども人連来る。折ゝ雨を用てう

さげて。こと人近来る為ふ演。花と左様ふ候そひて。そのことけを問

わどふ。お様いいても面なげふ此わどふ長ゝ命が長き様らひ医師

も手をさうをらへば若なのるれあゝえんゝこをふもあられぬんふ水

日本の恐を報ふ。こゝでと一人就寝ー。毎夜ゝ水を流。病気

平癒の祈うけて稲荷のこゝ人来るゝ。今宵ちやうど七夜

なり。その満願の夜ふいゝう。変化やゝと怪めゝを出ゝ人ふ

元つけゝゝ。この身の祈ひの恨いねゝといひけゝを人平伏。

変と云て泣いるまで。五個も俱に共ひ死。何とのべき詞もなくて。
その志を感ずるのことまことに涙あるる五個の力士も。兎の目ふりの
流ごとく一面ぐるぐる感んるみ志。ひとしく笑でき人林ーてん打の
ようるの奥座こみさんゲ女の身で命げけと覚悟せぬ。
く出ることでいるのその志ーを神仏も納受おるのでるのんと
せう。サアさやー髪を撫て。抱でも若みさもト紙戸人ゑり入後捨
夜数なことを抱人まつ。痛ーれての行さーぬ何ーるのう面目
なくて。物でもいそび涙を落。長ぬ布もとまを吹て。漫ぬ感涙をうる

めこ。若病気全快るのさび。厚くその志ぬ報ひんとこをあの人けまを。
かくてお俤ゲ体んの。神ぬ参ーてやさとのぬ刻ーてさ長ぬ参ゲ病
若も。見ぬ快くて二十日許ぬ。全く快気なりけまび。その歌ぬ
大うさのーび。さまび歌びの題をひーてさ人をを答感さんと弘ぬ
物んを指めく。松次郎支掃松と助。お寅ぬ演ぬ面ぬ更ーその
彩ーの俳諧等。その他病中見舞を来る人をうち招き。
きどきまうり行ーまと。その歌侍ぬんを。その中ぬ長ぬ布い見も
全く神の加護。まう稲荷人神酒徳利を伝へんのと奥座ある。

稲荷の祠人一人出きて。掃除をなす。門の扉のうちより少しく。
開くるものあるとみるまでに。一度の恐怖あり。拾さんとすれども
絹ぶくろ。そこなしく。母子流浪。便なきを。みるに。世を
長く。帰り。今安穏なる人の大恐あり。
拾るかこのわどの重きを。便全枝のわど。光来の。恐ることを不絶のの
色。然るに。神の恐怖をりん。コが命を長
。僅こせの人。幸にまた長く帰り。嬉子さと毎一品のびきく
と流で流し。胸をなで汲息つき。拾はまでの恐れもあるべきの川

出るもおひ拾ず。命を掃りんとまでを祈る人世をも稀なる恐み女と
涙のあるものの。者の代の恐さ人形のわきを。一個の丈夫あて。
拾の恐も知りあるべく。年老の母人を。恐るを任して若労させ。
この月日を絶を世を送ると不孝なるうの人色。今日一家の
人ども。寄集ては。慌俳自一今ようなて。母人移り家
職を勤め母を楽し世をさせん。夫この。絹ぶ。涙人の
揚のまび彼てりん。渾ぶと。子を。涙を人の拾ひ。内世を
云出んとんを納めて神を涙。祈て世方へ帰りるぶ。強く拒さ

酒の人々も掛けて愛度とうち歌び酒宴不断を後一乃依長く
命の花ときを人手ならひて形を改め右の次第を具不得り毋と
教ふ示教ふ示一生の人々を尽て感仏せざるものなく。況て妙仏
と尊び給へ。歌ぶ可限り。ことを示て目を擇と毋角人引後を元波
お絹ハ詠右つぐ事如とを。抵掌の儀式ていとり給び千龍万歳
と祝ひ文家の眺ことまずく涼く。月出発去てを迎へける

濃の月後編巻て下大尾